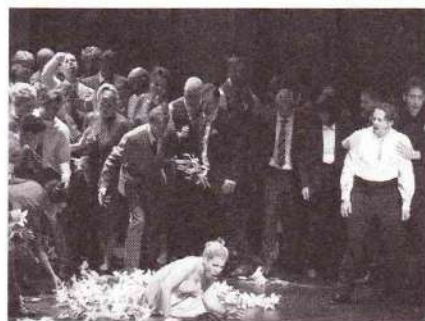


深さや、レオノーラの色気などを表現できるはずのこの名曲が、あまりにも縦割りの音楽であっさりこなされ、拍子抜けした。そのような意味でも、このベルカント・オペラの真の主役はフェルナンドを歌ったマシュー・ボレンツァーニであろう。弱音から激昂するところまですべての声に感情がこもり、歌心が聴く者の心に響く。所見日10月31日の前の公演では不調のアナウンスがなされたというが、この日は不安を感じさせず熱唱していた。特に最後のアリアはすべての複雑な感情を上手に表現して、共感を誘った。バルダッサレを歌ったミカ・カレスのバスも美声を聴かせた。アルフォンソ二世のマリウシュ・クヴィエチェンもよく歌えてはいたが、特に演技で光っていた。

カレル・マーク・チションの指揮は、特にフォルテで振りが固くなるため、フレーズも不自然に鋭角的になる部分が散見されるが、オーケストラを美しく響かせ、夫人のガランチャだけでなく、すべての歌手を自由に歌わせ、ドニゼッティの音楽を生き生き、ドラマティックに蘇らせていた。

アメリ・ニールマイヤーの演出は、現代に置き換えたために話の展開に無理が残ることに目を瞑れば、昨年のG7開催地エルマウ城創設者の曾孫アレクサンダー・ミュラー・エルマウの美しい舞台美術と共に楽しませてくれる舞台に仕上がっていた。(中東生)



エリーナ・ガランチャ(中央下)が初めての役を歌う記念すべき上演だった。バイエルン州立歌劇場の《ファヴォリータ》から ©Wilfried Häsel

Opera バイエルン州立歌劇場 《ファヴォリータ》

バイエルン州立歌劇場2016~17年シーズン・オープニングの新演出《ファヴォリータ》(ドニゼッティ)は、「エリーナ・ガランチャの役デビュー」を、「100年以上もこの演目を上演されていないこの劇場で」ということで、以前から計画されていたものの、ガランチャの産休で延期され、ようやく実現するというので先シーズンから注目されていた。

ガランチャの、常にまるやかな響きの歌唱は耳に心地良く、いつも一種の冷静さを感じさせる彼女の持ち味は、この「王の妾」という陰を持つ役には合っている。ただ有名なアリア〈これがまことか…いとしいフェルナンドよ〉など、粘着質なレガートでフェルナンドへの愛の